

平和願い空襲体験を後世に

語りつくす会 助け合いの精神も伝える

豊橋前芝中で「聴く会」

体験者の声に耳を傾ける生徒―豊橋市前芝中学校で



多くの命が奪われた豊川海軍工廠（しよ）空襲（1945年8月7日）から間もなく69年を迎える。豊橋市前芝中学校（谷中緑校長）で31日、戦争体験を聴く会が開かれた。太平洋戦争末期、豊橋と豊川で起きた空襲体験者が1年生や教員ら約40人へ、戦争の悲惨さを語り継いだ。（飯塚雪）

同校正門横には、勤労動員により亡くなった、前芝村前芝国民学校の高等科男子生徒10人の慰霊碑「豊川海軍工廠戦没学徒の碑」がある。彼らが語りかける悲痛な歴史を思い、昨年から平和教育の一環として、豊橋空襲や豊川海軍工廠空襲などについて学習を始めた。

この日は、豊橋空襲を語りつくす会メンバーの市川千代子さん（92）、渡辺のり子さん（82）、栗田昌之さん（82）、羽田光江さん（76）を講師に迎え、生徒らは4グループに分かれ耳を傾けた。空襲当時、小学1年生だった羽田さんは疎開先から豊川海軍工廠が爆撃を受けるところを見ていた。「当日は晴天で米軍B29爆撃機がやってきたのが見えた。一面火の海だった。もう少し早く終戦を迎えていたら」と悔しさをにじませた。タンポポの葉を食へ飢えをしのいだ終戦直後を振り返り、「食料を分け合い、助け合いの精神が強かった。平和になり、自分のことだけ考えるようになっていく」と現在を憂いた。

また、教員として女学生100人を引率し、武器工場で働いていた市川さんは、米軍機から何度も攻撃を受けながらも銃痕を見て逃げた。前芝中の山川実久さん（13）は「空襲で怖い思いをする人がいる。これ以上戦争は絶対起こしては」と話した。